

# 通信制高校におけるeラーニングの取組み

小林 道夫

## <要旨>

通信制高校には、学力において大きな差がある多様な生徒が在籍しており、個別指導による自律学習の支援が求められる（小林 2008）。そこで通信制高校では、個々の生徒の自律的学習を支援するため、従来の郵便でのレポートのやり取り、テレビやラジオ放送視聴を中心としたやり方に加えて、情報通信技術（Information and Communication Technology 以下 ICT）を活用したeラーニングの取組みを進めている。ICTを活用することによって学習への動機づけが高く、学習継続性も高くなると予想しての導入であろう。しかしながら、生徒たちの学習継続率が低く、3年または4年間で卒業単位を修得できず卒業を諦めてしまう生徒が多いという問題がある。

eラーニングに関する先行研究では、eラーニングが学習者の自律的学習を促すと指摘されているが（鄭、久保田、羅、寺嶋, 2006）、それらの指摘を裏付ける事例のほとんどが高等教育か生涯教育、すなわち、成人を対象としている。一方、高校生、特に高校を中退した生徒を対象にした場合、自律的学習が困難であるため、学習支援の方略も異なると考えられる。そこで、本稿では、通信制高校におけるeラーニングの取組みについて検討する。

## 1. 高校中退、不登校の現状

現在、我が国には、5万5千人を超える生徒が高校を中退しており、その対応が急務となっている（文部科学省、2010）。高校中退の背景には、学業不振、学校生活・学業不適應、経済的理由、病気など様々な理由があるが、大学への全入時代を控え、高校を中退した生徒に、高校卒業の機会を提供し、その支援をすることが不可欠である。この取組みのひとつに、通信制高校があり、遠隔における高校の授業を支援している。

通信制高校には、2000年以降毎年18万人を超える生徒が通っている。通信制高校の生徒たちの多くは全日制高校を中途退学または中学時に不登校であったという事情がある。政府が2008年12月に策定した新しい「青少年育成施策大綱」では、「困難を抱える青少年の成長を支援するための取組」は重点課題の一つで、社会的自立における困難を抱える青少年の問題、特に不登校や高等学校中途退学等、学校段階でのつまづきなど様々な問題が複合的に存在している。文部省調査によると、高等学校の不登校生徒数は2000年以降6万人から5万人に推移している。高等学校中途退学者数は1995年度以降7万人台で推移しており、全生徒数に占める割合は2～3%の範囲で推移している。中退の理由としては主たる理由として「進路変更」を挙げる割合が高かったものの、1998年以降は「学校生活・学業不適應」が最も高くなってい

る。2009年に文部科学省で実施した調査によると、高等学校中途退学者のうち約4割が通信制高校に編入または転校している。通信制高校が中退者の大きな受け皿になっていることがわかる。

## 2. 通信制高校

我が国の高校通信制課程は、勤労学生や主婦などを対象に教育の機会を与えることを目的として1956年に「高等学校通信教育規定」の改正によって学習指導要領の基準に含まれることになった。設置当初は働きながら高校卒業の資格を取る事ができるとして勤労学生が多く在籍したが、現在は就職しながら学ぶ生徒はほとんどおらず、不登校や学校の方針に合わず全日制高校を退学した生徒が多く在籍している。つまり全日制高校に通えない生徒の受け入れ先とした存在意義に変化してきた。

1961年の学校教育法の改正により通信制だけの独立校が認可されたことによって、各県で地域の生徒を対象とした公立通信制高校が誕生するとともに、全国規模で生徒募集を行うNHK学園高等学校や東海大学付属望星高校など広域通信制高校の設置が始まった。公立学校の通信制高校は、ほとんどが全日制的の高校に通信制課程を併設する形で設置されていたが、この改正によって通信制独立校が作られることになった。2003年から株式会社の学校運営が認可され、企業が通信制高校の運営に参入できるようになった。アットマーク・ラーニング社のアットマークインターハイスクール、アットマーク明蓬館高等学校やソフトバンク系列のルネサンス高校など株式会社立の広域通信制高校が開校し、通信制高校を取り巻く環境が活性化されeラーニングの導入などICTを取り入れた新しい教育を実施する学校が登場し、生徒たちにとっても自分にあった通信制高校を選択できるようになったと言える。現在では、通信制課程を持つ高校は、通信制独立校88校、全日制

の併設校121校の200校を超え、在籍生徒も増加傾向にあり18万人を超えるまでになった(文部科学省学校基本調査, 2010年)。

しかしながら、通信制高校が認可されてからこれまで解決されぬまま問題としてあるのは、生徒の学力においてかなり差があることである(小林 2008)。この問題に対応するため、従来の郵便でのレポートのやり取り、テレビやラジオ放送視聴を中心としたやり方に加えて、eラーニングを導入し、個々の学生の学力に応じた指導を行おうと試みた。ところが、学習継続率の低さは相変わらず深刻な問題であり、3年または4年間での卒業率は、3割以下である(文部科学省学校基本調査, 2010年)。多くの生徒が、卒業単位を修得できず、卒業を諦めてしまう理由として、通信制課程が全日制課程と異なり対面授業は最小限に抑えられ、自宅での自学自習を中心とした教育システムであることが考えられる。言い換えれば、通信制高校では生徒の自律的学習が前提となっており、それができない生徒は卒業まで学習を継続する事ができない。

生徒の自律的学習を支援するための対策として、たとえば、NHK学園高等学校では、2003年から従来の郵便でのレポート添削とテレビ・ラジオ放送の活用というスタイルに加えてICTを活用したeラーニングを導入した。ところが、eラーニングに関する先行研究では、eラーニングが学習者の自律的学習を促すと指摘されているが、それらの指摘を裏付ける事例のほとんどが高等教育か生涯教育、すなわち、成人を対象としている。一方、高校生、特に高校を中退した生徒を対象にした場合、成人の学習の特徴は異なり、自律的学習が困難であるため、学習支援の方略も異なると考えられる。

## 3. 遠隔教育とeラーニング

### (1) 遠隔教育の定義

遠隔教育とはどのような教育を指すか、まず

「遠隔」という言葉は「時間」や「空間」が離れていることを意味する。そこで教育を「時間」と「空間」という2つの変数に分けて位置づけると、教師と生徒が同じ教室にいて行う対面授業は「同じ時間と空間」で起こる形態であり、インターネットやWebページを利用して離れた地域を結ぶ教育は「同じ時間で違う空間」で行われる教育形態である。よって遠隔教育とは、「同じ時間に違う空間で行われる授業形態」か、「違う時間に違う空間で行われる教育」と位置づけることができる(鄭・久保田,2006)。つまり距離的に離れた中でメディアを介した教授や学習活動を行う事を指す。

遠隔教育の歴史は古く、1833年にスウェーデンで郵便を利用した作文教育にさかのぼるといわれている(Holmburg,1986)。150年以上の歴史を持つ遠隔教育は世界中で様々な実践が行われ、郵便を活用したレポートのやりとりからラジオやテレビといった放送活用、そしてインターネットを活用したeラーニングと、教授者と学習者を結ぶメディアの変遷を繰り返しながら今日まで続けられている。

これまで多くの研究者が遠隔教育を定義し理論化に向けて努力してきた。ムーアは理論形成にあたって、教育の分野を教授者と学習者が同一の空間にいる教育(Configuous Teaching)」とそうでない「遠隔教育」の2つのグループから成り立つことから研究を進め、「遠隔教育とは、教える場所から慣れたところで起こる計画的な学習であり、その結果、特別なコースデザインの技術、特別な教授法、電子技術や他の技術による特別なコミュニケーション方法、そして組織・運営面での特別な準備を必要とするもの」(Moore,1977, p.2)と定義している。そしてキーガンは、「教授者と学習者が直接に対面することなく印刷教材、放送教材、オーディオやビデオ教材などを介して教授・学習活動を行う形態」(Keegan,1996,p44)の教育と定義した上で、遠隔教育を他の教育形態と比較しながらその特性を分析することで概念を明ら

かにし、定義を構成する5つの要素を抽出した(keegan, 1990;1996)。

- 1) 学習過程のほとんどを時間において教授者と学習者が離れている。
- 2) 学校のような教育機関のもとで計画的に教材を提供し、学習者を支援する。
- 3) 印刷教材やオーディオ、ビデオ、コンピュータなどのメディアを用いながら学習する。
- 4) 教授者と学習者が双方向のコミュニケーションがとれるようにメディアを活用する。
- 5) 学習プロセスにおいてグループとして学習するのではなく、個別学習を基本とする。

これらの定義は、遠隔教育を対面教育と区分しながら遠隔教育の特性を説明している。

## (2) eラーニングの定義

eラーニングは、1990年代後半から発達してきた。ローゼンバーグは企業教育の観点から「インターネットを利用し、知識と能力向上のために多様な学習活動および学習資源を伝達する活動」(Rosenberg,2000)と定義している。ホートンは「eラーニングとはインターネットとデジタル技術を利用して教育を行うこと」(Horton,2001)と定義し、インターネットとデジタル技術のさまざまな機能を活用することで多様な教育を提供できると主張している。つまりWeb上に教材コンテンツを提供するなどインターネットと情報機器を活用して双方向コミュニケーションとりながら学習を行う形態として捉えている。このような議論に基づいてeラーニングの概念を整理すると、「eラーニングとは学習者中心のフレキシブルでインタラクティブな環境の中で、情報や教授内容を伝達し、多様なスタイルの学習を支援するインターネットやデジタル技術を活用した学習システム」であると定義できる(鄭・久保田,2007)。さらにeラーニングの特徴を整理すると以下の6点にま

とめることができる。

- 1) eラーニングはインターネットをはじめとした情報通信技術 (ICT) を活用する。
- 2) eラーニングとは単にインターネットから提供される情報を指すのではなく、様々な学習活動までを含む幅広い概念である。
- 3) eラーニングによって、時間や地理的条件などの制約を受けない、フレキシブルでインタラクティブな学習環境を提供できる。
- 4) eラーニングは学習者中心の新しい教育パラダイムを実現する遠隔教育の一つの形態である。
- 5) eラーニングは自学自習をうながし、自律的な学習環境を提供するだけでなく、他の学習者との情報交換やインタラクティブなコミュニケーションを活性化させる。
- 6) eラーニングは仕事と学習を総合的に結びつけることができる。

### (3) 遠隔教育の発展

通信教育とは、対面授業を行わず自学自習で学習を進め、レポートの郵送を中心とした学習方法をさす。現在のように郵便だけでなくテレビやラジオ放送、ビデオ教材、インターネットといったメディアを活用する方法に発展したものを遠隔教育という。キーガンは、遠隔教育はもともと通信教育を発展させた概念で、「教授者と学習者が直接に対面することなく印刷教材、放送教材、オーディオやビデオ教材などを

介して教授・学習活動を行う形態」と定義している (keegan, 1990 ; Holmburg , 1986 ; 鄭, 1991)。鄭&羅は、遠隔教育の発展を三つの時代に分け、第一期が郵便制度を利用した通信教育の時代で成人を対象に教育の機会拡大を目指した時代。第二期が放送などマスメディアを利用した産業化した時代で、教育機会をさらに拡大し教育方法が多様化した。そして第三期がICTを取り入れたeラーニングの時代で、教授・学習活動の質的な向上と双方向性を目指した時代とした (鄭&羅, 2004, 鄭, 久保田, 羅, 寺嶋, 2006)。つまりNHK学園高等学校のように放送番組やインターネットを利用しeラーニングに取り組んでいる通信制高校は、第二期から第三期に進化している遠隔教育として位置づけることができる。

キーガンは、「遠隔教育とは、教授者と学習者が直接対面することなく印刷教材、放送教材、オーディオ教材やビデオ教材などを介して教授・学習活動を行う形態」の教育であると定義した (keegan, 1996 ; Holmberg, 1986 ; 鄭, 1991)。通信教育を発展させた概念として遠隔教育があり、その発展には3つの時代に分けることができる。

## 4. eラーニング導入事例

2003年に学習指導要領の改訂が行われ、通信制課程においてeラーニングでの単位修得が認可された (文部科学省 2003)。現在では20

	第1期	第2期	第3期
遠隔教育の形態	印刷メディアを基盤とした通信教育	放送メディアを基盤とした遠隔教育	情報通信メディアを基盤としたeラーニング
おもな効果	教育機会の拡大, 勤労学生に教育の機会を与える	教育方法の多様化および大衆教育の拡大	インタラクティブで個別化された遠隔教育の発展
事例	一般成人を対象とした速記教育など	NHK 学園高等学校や放送大学など。各国の通信制大学など	新しい通信制大学や各国のサイバー大学など

表1 遠隔教育の発展段階の特性

校を超える通信制高校がeラーニングを導入した学習を行っている。それらの多くは、全国の生徒を対象とした私立の広域通信制高校である。eラーニングで取り組んでいる広域通信制高校2校の事例を比較し、eラーニングコースの学習方法、教師の関わりやサポートのあり方の違いについて検討する

### (1) NHK 学園高等学校

NHK 学園高等学校は1963年に日本放送協会学園高等学校として開校し、当時は最新のメディアであったラジオとテレビを使って教育番組を提供した。生徒は各科目の教育番組を視聴しながら学習を進め単位を修得し卒業を目指した。2009年までに6万人以上の卒業生を送り出しており、東京都国立市にある本校には約3700名の生徒が在籍している。国立本校では、週1回程度でスクーリングが行われているが、全国に協力校が40校あり、地方の生徒は近くの協力校のスクーリングに週1回から月1回程度の割合で出席する。また定期的に出席できない生徒のために夏休みや冬休みに集中スクーリングも実施している。日常の学習は自宅でNHK 高校講座を視聴し、レポートを作成し添削を受ける。評価はレポートと定期考査の試験で行う。

しかし、開校以来抱えている問題として、単位修得率や就業期間内の卒業率の低さが解決されないままであった。そこで、学習継続のための支援の一環として2003年よりネット学習コースを新設し、eラーニングへ移行を始めた。生徒は科目ごとにeラーニングでの履修を申し込むことができ、ネット上で指導を受けている。

#### ① eラーニングシステム「Online Campus」の概要

2003年よりeラーニングシステム「Online Campus」の運用を試験的に始め、まずはレポート提出や返却を4科目でスタートした。現在で

は40科目以上で運用されており、生徒は科目毎にネット学習を選択するかどうかを決める事ができる。2011年現在で約2000名の利用者があり、これは在校生の6割にあたる。

ネット学習では、まずシステムにログインすると履修している科目毎の更新情報が一覧できる。主な学習コンテンツは番組を視聴したあとに提出するレポート課題である。番組1回分のレポート課題をユニットとして扱い、ユニットをまとめてボックスとして年6回に分けて提出しなければならない。教材の他に、自分の学習状況のチェック機能、先生への質問と返答が一览できるQ&Aやクラスメートや先生へのメール機能、所属するクラスのBBS機能がある。

#### ② 学校の学習支援体制

NHK 学園高等学校は、全国に3700名を超える在籍生徒がいるマンモス校である。1クラス約40名の担任制をとっており、担任教師は生徒と面談やメール、電話で連絡をとりながら学習サポートを行っている。地方の生徒の場合は、協力校の専任指導員が担任の代わりに担って生徒と連絡をとりながらサポートをしている。

科目履修の条件として、週1回の放送番組視聴を義務付けており、レポート課題も番組で学習した内容の確認が中心となっている。番組はWebサイトでストリーミングでも視聴できるので、放送を見逃した時は、Webでいつでも視聴できる。よって、定期的に番組を視聴しレポートを作成し、添削を受けるという学習スタイルを確立する事が重要である。生徒たちがこのような学習が継続できるように、担任はeラーニングへのアクセスをチェックし、生徒一人一人に個別で連絡を取りながら学習支援を行っている。しかし、教師一人で40名程の生徒の学習チェックをしていくことは難しく、スクーリングにも出席し、eラーニングへのアクセスやレポート提出も順調な生徒は問題ないが、そうでない生徒へのサポートは手薄になっている。そこで、特別なサポートが必要な生徒

を集めた少人数制のコースを作り、担任や教科指導の教員がメールや電話、家庭訪問などをしながら支援を行っている。

## (2) アットマーク明逢館高等学校

教育特区により2009年に株式会社立高等学校として開校した広域通信制高校である。アットマーク・ラーニング社が運営しており、明逢館高等学校を開校する前に2003年にアットマーク国際高校を開校し現在も人気を博している。明逢館高等学校の本校は福岡県田川郡川崎町にあるが、在籍生徒の多くは東京近郊に在住しており、生徒たちは品川キャンパスに通って様々なサポートを受けている。ネットコーチングコースでは、履修するすべての科目をeラーニングで学習し、教師やコーディネータから質問や学習の進め方のサポート等を受ける。評価は、eラーニングの学習状況、レポート提出、そして成果物で行われ、定期考査や小テストなどの試験は実施しない。スクーリングは本校で4日間の合宿を行う。開校して3年目だが、年々生徒数が増えており現在は30名程度がネットコーチングコースに在籍している。生徒一人一人に対して個別指導計画を立て、日常の学習は「Mypage」というeラーニングシステムで行っている。

### ①eラーニングシステム「Mypage」の概要

ネットコーチングコースでは、「Mypage」というeラーニングシステムを導入し生徒一人一人に対して個別指導計画を立て、学習指導を実施している。すべての履修をeラーニングで行うため、「Mypage」の機能には、履修の登録から教科書の発注、ライブ映像またはVOD授業、授業資料、先生への質問、レポート提出、成果物の作成、生徒会活動、部活動など、学校の機能のほとんどがある。各科目の履修は、毎週1時間か2時間分の授業をVODで受けながら学習し、レポート課題を作成し提出する。履修している教科の授業をストリーミング配信し

ており、同期でも非同期でも受講できる。部活動は、パソコン部や写真部など顧問の教師が入部を認めれば、部員の生徒はいつでも自由に書き込む事ができる。近年始めた試みで、生徒同士や生徒と教師の交流の場となっている。

### ②学校の学習支援体制

通信制高校に入学する多くの生徒は、中学の時に不登校であったり、学校の方針に合わず全日制高校を退学している。このような状況から、自信を失い、学力も学ぶ意欲も低い生徒が多いのが現状である。これらの生徒たちにeラーニング教材やテキスト教材を与えたとしても自学自習で勉強する事は難しい。そこで明逢館高校では、生徒たちの学習支援の取組みとして3つの特徴がある。まずは生徒一人一人に対しての個別学習計画である。個別学習計画とは、教師と生徒が面談をしながら教科毎に本人の学力、学習状況、学習環境などの状況に合わせて学習計画を立て、保護者と連携をとりながら学習チェックを行うというものだ。次にコーチング制度である。コーチング制度とは、生徒と面談を重ねながら勉強についての悩みや学習の進め方についてアドバイスするコーディネータを生徒一人一人に配置する。コーディネータは教師ではないので、教科内容を教える事はないが、生徒の学習状況を把握しながら、生活や趣味等学習以外のことをサポートする。まさに生徒が学習継続できるように導くサポーターであり、大きな成果をあげている。

そして3つ目は、少人数制の担任制度である。全日制高校ではクラスに30～40名の生徒が在籍し担任が1人という場合が多い。通信制高校では、1クラス50名以上という学校もある。それに対して明逢館高校では、1クラス8名程度である。前述したように通信制高校に入学する生徒たちは、自信を失い学習意欲を失いかけている子が多い。つまり全日制高校の生徒たちよりもより手厚いサポートが必要とされる。よって少人数制は生徒の学習継続に効果がある。

## 5. まとめ

本稿では、eラーニングを導入している通信制高校について検討した。通信制課程は、毎日学校に通わなくても自分のペースで学習を進める事ができる反面、制約がない分自学自習で学習を進めて行く事が難しい。学習を継続させるためには、特別な支援が必要であることがわかった。

---

### 参考文献

- 猪貝達弘 (2005) 通信制高校におけるeラーニング化の実践と評価. 岩手県立大学大学院ソフトウェア情報学研究科 2004年度修士論文, 岩手県立大学大学院
- 鄭仁星, 久保田賢一 (編著) (2006) 遠隔教育とeラーニング. 北大路書房, 京都
- 小林 裕光 (2008) 通信制高校におけるWBTシステムを活用した遺伝学習の実践. 教育情報研究. 日本教育情報学会学会誌 23 (4) :27-34
- マイケルG. ムーア. グレグ・カースリー (共著) 高橋悟 (編訳) (2004) 遠隔教育. 海文堂出版, 東京
- 文部科学省 (2011) 平成22年度「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」
- [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo3/047/siryu/\\_icsFiles/afieldfile/2012/03/21/1318690\\_02.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/047/siryu/_icsFiles/afieldfile/2012/03/21/1318690_02.pdf)
- ノールズ, M. (2002) Malcom S. Knowles (原著), 堀 薫夫 (翻訳), 三輪 建二 (翻訳) 成人教育の現代的実践—ベダゴジーからアンドラゴジーへ. 鳳書房